

マンゴーを茹でる？！

モザンビーク・ザンベジア州の農村部にはマンゴーの木があちこちに自生している。農家の回り、道端のいたるところで見かける。マンゴーの木は強い日差しを遮って日陰を作ってくれるので、休憩やおしゃべりの場となる。12月、マンゴーの季節になると子どもたちは食べ頃を見定めて、石や枝を投げつけ果実を落とす。木の持ち主はわからないため取ったもの勝ちだ。マーケットにもたくさんのマンゴーが売りに出される。たいていは生で食べるが、茹でたマンゴーは衝撃だった。農繁期、田畑の近くに仮住まいをしている農家を訪ねた時のこと。農作業の合間にマンゴーを調理していた。茹でることに適したマンゴーらしく、虫がいた場合殺すためでもあるらしい。茹で上がったマンゴーは皮が膨らんでプヨプヨしていて、手に持つとあまりいい感触ではなく食べるのは気が進まなかった。皮を剥くためにほんの少し切り込みをいれた瞬間空気が入り、裂けて割れた。黄色い果肉とたくさんの繊維が表れて、焼き芋のようだった。ホクホクとした食感で、甘酸っぱい味が、なんて美味しいのだろうと驚いた。生で食べるのとは全く違い、どっしりとお腹に溜まった。マンゴーの新しい発見であった。(清治 有)



写真:お昼少し前、仕込みをする女性

ザンベジア州・ナマクラ郡 2016年

“アールディーアイ通信 No. 103/2019”から

カカオの果肉を食べる

インドネシアのジャワ島東部の村落を出張で訪問する機会があり、その際、カカオの果肉を食べる機会があった。カカオはチョコレートの原材料として生産される果樹であり、昨今世界的な需要が高まっているため、熱帯地域の国に赴任するとカカオの木を目にすることはそうめずらしくは無い。カカオ豆の世界生産量は、FAOSTAT(2019年)によれば、1997年からの20年間に約1.7倍に増えた。同じ期間にインドネシアの生産量は2倍になり、コートジボアール、ガーナに次いで三番目に多く、世界生産量の約12.7パーセントを占める。

チョコレートに利用されるのはカカオの実の種であり、その種の周辺についている果肉が食べられる、ということはあまり知られていないのではなかろうか？実際にカカオの実を割ってみるとたくさんの種の周りには真っ白い果肉が付いており、これを種ごと口に入れて種から果肉をこそぎ取るようにして食べた。元来、種を



写真:訪問先で出されたインドネシア料理と右下の黄色いカカオの実

ジャワ島・ガラハン村 2019年

利用する目的で栽培している果実のせい、果肉は薄くて可食部は少なく、また種から果肉が離れにくい感じがある。しかしながら、その味は甘酸のバランスが良く、他の果物に例えると、マンゴスチンとソーソップの中間のような、さわやかで上品な味わいであった。普段口にするココアやチョコレートからは想像の付かない風味である。

(矢野 史俊)

“アールディーアイ通信 No. 102/2019”から

農民グループと共同で設置したドリップ灌漑

「半乾燥地コミュニティ農業開発計画プロジェクト」が実施していたコミュニティ支援活動に、トマト、ピーマン、ナスなどの野菜を生産する農民グループがドリップ灌漑を申請した。節水灌漑はケニアの半乾燥地の農業開発に欠かせない技術である。プロジェクトは畑作りからドリップ灌漑の設置、栽培まで一貫して支援した。本灌漑システムでは、水タンクからフィルターを通してチューブに分水し約 500 平方メートルの面積を灌漑した。チューブから作物近くに水滴が落ち始めた時は農民も大喜びした。その後、地域の農業祭で周辺農家へ紹介をした彼らの顔は大変誇らしげだった。

年間降雨量が 500 ミリ以下の半乾燥地での野菜生産にドリップ灌漑は有効である。高地に降った雨が大地溝帯の山の中腹から湧き出る水を、地域の農民はもと



写真: 農民グループと共同で設置したドリップ灌漑

ケニア・ケイヨ県イテンの近く 2010 年

もとパイプを設置して水を引き、簡易なスプリンクラーを使って農業にも利用していた。目に見える成果をもとに新たにシステムを自ら購入するグループも出た。同時に高収量品種のトマトも導入して収量を上げることが出来た。鈴なりに実ったトマトにはびっくりした。設置までは頑張っても、その後の栽培、特に病虫害でつまづくグループもある。これが次のハードルである。(佐藤 勝正)

“アールディーアイ通信 No. 101/2019”から

キリマネ司教区の聖堂

キリマネ市街地の南端部、クワクワ川に面して重厚感のある廃墟めいた教会がある。丸屋根をかぶった鐘楼が対を成してそびえる。教会の庭にいた近隣住民から内部に入れると聞いて足を踏み入れてみた。中は、一部が朽ち落ちた天井から射す光で思ったより明るく、壁画の痕跡の一部や、欠けたステンドグラスには緑色の部分が残っていた。壁や床に埋め込まれた石の銘板には 1853、1861、1864 などの西暦が刻まれていた。壁や床の歪みと銘板のそれが異なり、文字の中央を横方向の細い一筋の亀裂が走り、ひとつの行で上下がずれている箇所もあった。隅の鐘楼を上る階段は 3 段上ると 90 度曲がり、急で狭い暗闇の中で何度か繰り返すと青空がまぶしく開けた。



ヴァスコ・ダ・ガマの 3 隻の艦隊が、1498 年インド洋航路開拓の途次に停泊したと伝えられる場所に、18 世紀後半に建てられたカトリックの聖堂である。1976 年までキリマネ司教区の聖堂であったが、新しい聖堂が建立されて後しばらくして廃墟化が進み、今では夜間ならず者の巣窟となることもあるらしい。230 年ほどの歴史を刻み、2018 年までの改修工事計画を聞いたことがあるが、まだ荒れ果てたままである。(濱中 透)

アールディーアイ通信 No. 99/2019”から

写真: 隣接するホテルから見た教会

モザンビーク・キリマネ 2018 年